

ちょっと苦手な授業の形式で嫌だなと思っていました。しかし、グループになって議論しあうことで自分とは全く違った意見を知ることができました。また、その意見を聞いて「いや、私はこう思う」という主張もできるようになりました。

- ・私が生徒指導論で学んだことは討論することの大切さ、重要さである。討論をすることによって問題の本質がより深く見えてくることや、自分の意見をより確かなものにできたからである。問題の本質がより深くみえてくることに関しては、様々な人の意見を聞いたためと考える。……これは決して一人ではできなかった。
- ・私が生徒指導論を通して学んだことは大きく3つです。……2つ目は、考え方が人によってまるで違うということです。この授業は、話し合いと発言が中心でした。……人それぞれの考え方が違うということを感じました。自分がいかに固い頭をしていたのかわかりました。そして最後は、自分が確かに意見をもっているということです。正直、私は人前で発言したりすることがあまり得意ではありませんでした。何かおかしいことを言っているのではないかと、バカにされるのではないかと、そんな不安をおびえていました。しかし、この授業では絹村先生が発言の機会を多く設けてくださいました。この機会は絶対にいかすべきであると、毎回緊張はしましたが、勇気をふりしぼって何度も発言することが出来ました。そのたびに先生は私の発言の主旨を反復してくださいました。そのおかげで、自分の意見が、きちんと意見として成り立っているということを自覚することが出来ました。
- ・生徒指導論の授業では、性の問題やいじめ、体罰など様々な問題について実践記録などを読み、討論を行ってきた。私と同じ考えの人もいれば、異なる人もいて、人によって考えや信念は違うということを知り、改めて実感できた。それは私たち学生だけでなく、教師も、生徒も同

- じである。誰が正しいとかでは無く、互いに理解し、考えることが重要、と改めて認識できたことが、私にとって最も貴重だと感じている。
- ・あらゆる視点を持つためには、他の教師に助言をもらうなど協力することが重要である。他の授業でも、これについて、耳にしたことはあったが、この授業における毎回のグループ討論を通して、その重要性を身をもって体感することが出来た。もともと、討論などで、自分の意見を言うことは得意ではないが、グループ討論の中で、自分の意見に対して、他のメンバーから反応を得られる事に喜びを感じた。生徒も、自分の意見に対して、教師がしっかりと反応をしてくれると嬉しいと思うので、生徒の話をよく聞き、生徒理解に努める教師を目指したいと思った。
  - ・私が生徒指導論を通じて学んだことをあげると、対話の大切さである。……相互の認識の乖離はあっても我々は講義の中で対話を通じて意見を共有することができたし、実際に意見を変える人も見られた。これは対話の重要性が示された一例であろう。教育現場には柔軟な意見が必要であることは言うまでもないが、それは対話を通じて生じる物であろう。この講義はそれを知り、実践できたものだと思う。
  - ・ほぼ毎週グループワークをして、自分と違う意見をきいたり、同じ意見でも違う見方からの考えを聞けたりして、さらに自分の意見を深めることができました。この授業を通して、他者と意見を交わすことの大切さを学びました。これから、実際に教職についてもつかなかったとしても、他者と交流し、自分の意見を発表しなければならない機会はたくさんあります。そういうときに、他者を尊重し、意見を交わすことのできる人間になりたいと思いました。
  - ・授業内でグループで話し合っ意見を出し合う機会が毎回あり、自分にはなかった考え方や意見、違った意見から生まれる新しい考え方な

ど多くの発見があり、このようなコミュニケーションが教員になった時、職員室内で同じようにできたら先で述べたようなよい生徒指導ができるのではないかと思う。このようにたくさん話し合うことができて自分の中に色々な考え方を生み出すことができるようになった。これも生徒指導論で学んだことの1つだと感じている。……絹村先生、一緒に受けていた皆さん、ありがとうございました。

- ・ 班での議論からは、他の人と複雑でシビアな問題について、自分の考えていることを恥ずかしがらずにはっきりと伝え、他の人の意見もしっかりと受け止めて生徒のために何が最善かを考えていくという作業の進め方を学べたと思います。これは生の現場では一体どこまで為されていることなのかはわかりませんが、是非ともこのように生徒に寄り添った教師、教育を目指したいと強く感じました。
- ・ 私は生徒指導論の授業を通して様々なことを習得したが、他の学生との議論を深めていくことによって、当初自分が想定していなかった考えや選択肢が続出したことが習得した事柄の中で最も意義のあることだと思う。……自分は教員になることが第一志望ではないため、実際に生徒指導を行う可能性は低いですが、当然ながら生徒指導論で学んだことが無駄になるわけではない。例えば、相手の視点に立って物事を考えたり、意見交換をして最適解を探求する姿勢は教員に特に必要とされているが、それはたとえ教員にならなくとも、中学生・高校生に限らず、あらゆる世代とのコミュニケーションにおいて有効活用することができるのである。そのため、私は教員になろうともならなくともこの姿勢を崩さず、学んだことを活かして将来への道を歩んでいきたいと思っている。
- ・ 毎回実践を取り上げて、グループで議論するときに、今までは自分の意見は普通の意見だと考えていたが、そうではなく、逆に反対の意見

が多かったときもあった。そのように自分の意見を客観視することができたのがグループディスカッションの場であった。……議論はどちらが正しいというわけでなく、議論することに意味があると考えていたため自分の意見が普通であるという概念を拭い去って、自分とは違った意見を持つ人を受け入れ、それについて考えることができた。このように以前の私であれば自分の意見が普通で、また自分は正しいと思うことが多かったが、逆に自分と違う意見の人の意見を聞き、自分なりに考え、またその人の意見がいいのではと意見を変えるようになった。従って生徒指導論の授業は単なる大学の講義を超えて自分を成長させる場となった。こうした場を設けてくれた先生や、話し合いをしてくれたみんなに感謝したい。また、後1年間みんなと教員免許に向けて頑張ろうと再度気持ちを高めることができる授業であった。半年間でしたが、たくさん先生とは意見交換をさせていただき、言葉には表せないくらい学ばせていただきました。本当にありがとうございました。

これらのコメントの中で、「授業を『公共空間』に」ということでいえば、私をもっとも注目したいのが「一緒に受けていた皆さん、ありがとうございました。」「話し合いをしてくれたみんなに感謝したい。また、後1年間みんなと教員免許に向けて頑張ろうと再度気持ちを高めることができる授業であった。」というものである。お約束の担当教員である私への感謝のことばは多かったが、「皆さん」とか「みんな」ということばで、同じ教室で学んだ「同胞」への感謝のことばを述べた学生がいたことに大きな意味があるように思える。それは、前期の「生徒指導論」の授業が、学生の対話と討論への参加によって「公開性」「複数性」「共有性」、そして「意外性」を併せ持つ「公共空間」として立ち現われ、その中で学生たち

が互いに学び合うことの意味と喜びを確かに体感したことの証ではないか、そう思えるからである。

## 注

- 1) 全国高校生活指導研究協議会（略して高生研）竹内常一や鞠川了諦らの研究者・高校教師によって1963年に設立された民間教育研究団体。「18歳を市民に」のスローガンのもとに、「学び」と「自治」を主な実践研究のキーワードとし、民主的高校教育の在り方を実践的に研究している。年2回『高校生活指導・18歳を市民に』（教育実務センター）という雑誌を発行している。
- 2) 岡野八代「他者に応答するシティズンシップ教育へ」『高校生活指導』184号（同上）2010年。この中で岡野は、ハンナ・アーレントの公共性にかかわる言説を独自に解釈したものと断りながら公共性の特徴を「公開性」「共有性」「複数性」とこれら3つの特徴をまとめるような特徴として「意外性・予測不可能性」を指摘している。
- 3) 子安潤「新科目『公共』の問題性と可能性」『高校生活指導』201号（同上）2016年。この中で子安は、学びの「パッケージ化」にかかわって、特に「アクティブ・ラーニング」が意見や討論に深まりがない「定型的学び」として普及していく問題性を指摘している。
- 4) 『高生研第49回名古屋大会紀要』私家版2011年 所収の浅田正登（絹村俊明）による実践記録 同じ内容で、以下の大会で発表された。高生研第49回名古屋大会 一般分科会 2011年8月6日、第55回全国特別活動研究協議大会 豊橋大会 2011年8月10日。発達障害やGID（性同一性障害）等、様々な「生きづらさ」をかかえた生徒たちのいる夜間定時制高校4年生が、お互いに、恐れ合いながらも求め合い、様々な困難を乗り越えて、「オズの国の魔法使い」の英語劇上演を成功させ、他者と出会い直し人とつながる喜びを知るという実践。
- 5) 遅まきながら文科省は、2015年4月「性同一性障害に係る児童生徒に対するきめ細やかな対応の実施等について」の通知を出し、続いて2016年4月「性同一性障害や性的指向・性自認に係る、児童生徒に対するきめ細やかな対応等の実施について」という教職員向け手引書を出しているが、教育現場ではトイレなどの施設面、制服の問題も含めて対応はまだほとんど進んでいないという実情である。
- 6) 小玉重夫「シティズンシップ再入門—市民教育に求められる教師の指導性」『高校生活指導（同上）194号 2012年 この中で小玉は、新しいシティズンシップ教育をすすめる教師の指導性の質として、教師が自らの権力性を一旦中断することで自身の教師性をたえず揺さぶり組み替えることの必要性を指摘している。
- 7) 土居和江「一平君が学校をやめたいと言っている」『高校生活指導』142号

青木書店 1999年。クラス内のいじめによって学校に来られなくなった一平君の問題をクラス全員に話し合わせ、和解させる。土居は、「私はいじめる側がクズだと思わない」と言い、いじめの中心になっていたリョウ君の家族問題での苦しみに寄り添う。いじめ問題をどうとらえ、どう向き合ったらいいのか、ひとつの道筋を示してくれる実践である。